
論 説

BBC シェイクスピア史劇 『空ろな王冠』をめぐって

狩 野 良 規

ひさしぶりに論じてみたいシェイクスピア劇の映像化作品が現れた。

詩と映像の調和——それが僕の初めての単著『シェイクスピア・オン・スクリーン』（1996年）のテーマだった。シェイクスピアの詩劇と映像の間には深い溝がある。視覚芸術たる映画は、少なくとも劇場へ沙翁の詩を聴きに行くという伝統のあるイギリスでは、傑作を生みだせないのではないか。観客に見せてナンボの映画では、その長所を生かせば生かすほど、原作の豊饒な詩の魅力を台無しにしてしまうのではないか。

ピーター・ホール曰く、「シェイクスピアの言葉の本質は、非映画的事であることを避けられない¹⁾」。

よって、シェイクスピア映画の「プロモーション・ブック」をめざした拙著は、辛口の映画論と評された。また、同書を出版した1990年代はシェイクスピア映画がブームといえるほど制作されて、「ニューウェーブ・シェイクスピア」なんて呼ばれた。だが、総じて大衆路線エンタテインメントを指向したそれらの映画は、沙翁劇をスクリーン上でいかに表現するかに関心が集中して、戯曲の解釈自体は陳腐というレベルにとどまっていた。だから、これもバッサバッサとやっちゃった²⁾——後はただ沈黙。

で、僕がシェイクスピア（映画）に沈黙している間に、映像技術はSFXからCG、さらに3Dへと日進月歩し、一方で基本的には俳優の肉体芸である演劇はハイテクの時代に取り残された感がなきにしもあらず。そんな21世紀も10年を過ぎて、おゝ、出てきた、出てきた。シェイクスピアの「原作の精神」と映画の撮り方の両方を知っている男

1) ロジャー・マンヴェル『シェイクスピアと映画』荒井良雄訳、白水社、1974年（原著1971年）、p.177。

2) 拙論「最近のシェイクスピア映画から」（『青山国際政経論集』第45号、青山学院大学国際政治経済学会、1999年所収）。

が仕切った沙翁映画が。

沙翁劇の演出から007映画まで監督するサム・メンデスが制作総指揮（共同）を務めた『空ろな王冠（*The Hollow Crown*）』（BBC, 2012年）。すなわち、『リチャード二世』、『ヘンリー四世』2部作、『ヘンリー五世』の歴史劇4部作を連続放映したBBCのテレビ番組である³⁾。この必見のシリーズを、4本まとめて批評しておきたい。

まずは、『リチャード二世』。演出は今が旬のルパート・グールドである。

開幕は木製の天井、そこから磔^{はりつけ}のイエス像が吊るされている。「墓と蛆虫と墓碑銘の話をしよう」、「王たちの死の悲しい物語をしよう」と、リチャード二世が3幕2場で語るセリフがナレーションで入る。カメラが下りてくる。

と、玉座にリチャード二世が座って、臣下たちを謁見している。その国王が第一声を発したところで、「うまい!」、「こいつ、何者?」と、僕はひっくり返ってしまった。ベン・ウィショー, 32歳（制作時）。しばらくシェイクスピアとご無沙汰しているうちに、ロンドンの役者たちはいつの間にか世代変わりしてしまった。

フワフワッと宙を浮くような声で、しかし流れるように沙翁の詩行を口にする。気まぐれなダメ国王に扮し、でもシェイクスピア役者として実に魅力的なのだ。すごい奴が出てきた。

対して、リチャード二世の従弟にして、後に彼を廃位し、自分が次の国王ヘンリー四世となるヘンリー・ボリングブルック。こいつは流れるように詩行をしゃべらない。セリフの切り方が変わっている。ふつうは無能な国王に叛旗を翻す役だから、やり手の貴族を演じてコントラストをつけるのだが、彼はどこか自信なさげ。

ロリー・キニアという役者である。外見も冴えない。丸顔で髪の毛はすでに薄くなり、でも、何っ、ベン・ウィショーと2歳しか変わらない34歳。今時のロンドンの俳優は、わからん!

ボリングブルックが追放され、彼の父親、すなわちリチャード二世の叔父ジョン・オブ・ゴントが嘆く2幕1場。瀕死の老貴族がイングランド賛歌を謳いあげ、そして国

3) ロンドン・オリンピックの年、芸術分野も何かやろうぜとさまざまな文化プログラムが企画された——そうでもしないとスポーツ界にみんな助成金を持っていかれるという裏事情もあったと聞かす。題して「カルチュラル・オリンピアド（Cultural Olympiad）」。その一環としてBBCテレビが制作した番組が、『空ろな王冠』である。

作品はDVD化されている。英語字幕付き。もともとは難聴者のための配慮だが、これが日本人にとっては助かる。日本語の字幕だと、それをついつい読んでしまって耳が閉じてしまうのだが、英語のサブタイトルなら、それをチラチラ見ながら俳優の朗じるセリフに集中できる。日本語より耳を邪魔しない。僕のお勧めは、まずシェイクスピアの戯曲を（翻訳でもいいから）読んでおいて、それから英語字幕付きのDVDで鑑賞するやり方。教室でもきわめて有効。

王に最後の忠言をするゴーストの見せ場（聴かせ場？）である。扮するはパトリック・ステュアート。彼のことはもちろん昔から知っている。顔なじみの俳優は、見ていて安心だ。「第二のエデン、天国にも比せられる……このイングランド」、カメラは彼を真正面からアップで捉え、名優のテンションの高い語りだけでこの場を作っている。

リチャードの今ひとりの叔父たるヨーク公もうまい。役者は誰だ？ ショーン・コネリーが老けて、体が縮んだのかと思ったら、なんとデヴィッド・スーシエ。わからなかった。従兄弟二人の対立に割って入る穏やかな性格の調整役だが、国王にもきちんと意見する。スーシエは名探偵ポアロだけの役者ではない。RSC でも幾多の名演技を披露したベテランの舞台俳優である。

ゴーストが他界し、リチャードがアイルランドに遠征すると、早くもボリングブルックが戻ってくる。ひとり海岸に上陸し、野原の道を歩いていると、馬に乗った三人の男たちが近づいてくる。ノーサンバランド伯が黙って彼に手綱を渡す。セリフなしの挿入シーン。ここは映像的に、象徴的に、短く、反乱軍が形成されていく様子を見せる。上手。

3幕2場。帆船が一艘、ウェールズ海へ。リチャードが陸に上がる。ボリングブルック決起、自軍の形勢不利の報を聞き、「王たちの死の悲しい物語をしよう、退位させられた王もいる、戦争で虐殺された王も……みんな殺されたのだ、なにせ王がかぶった空ろな王冠には死神という道化者が居座っているのだから」。

二人はフリント城で対峙する。金色の鎧兜よろいかぶとを身につけたリチャードがひとり城壁に立つ。後ろには金色の天使がラッパを吹いている飾り。孤立無援の国王は作り物の天使に守られているってか。彼はほどなく城壁からボリングブルックのいる地上に降りてくる。これもシンボリック。

3幕4場、王妃と庭師の爺さんが語り合う息抜きのシーンは、緑まばゆき庭園にした。これまで国王の白い衣裳、クリーム色のテント、金ピカではなく上品な金色の甲冑など、気品の漂う淡い色合いを見せておいて、ここはサッと色彩を変え、気分を一新する。なるほど、アクションだけが映像の見せ場ではない。

4幕はリチャードがウェストミンスター・ホールの議会で退位させられる、この作品のクライマックス・シーンである。ダメ国王の哀れで女々しい長ゼリフに、つつい同情させられる。格好よくない、でも文句なしのセリフ術。やっぱり芝居は役者だ！

有名な井戸の比喻、リチャードとヘンリーが互いに握りしめた王冠のその輪の中に、井戸のぞを覗き込むがごとき二人の顔を捉える。王冠の中空 (hollow) から道化者が見える、と。

ベン・ウィショーはRADA（王立演劇学校⁴⁾）を卒業した翌年、トレヴァー・ナン演出の『ハムレット』（2004年、オールド・ヴィク）に主演して、絶賛された。23歳でデンマーク王子を演じて名をなしたのは半端じゃない。今夏〔2015年〕はルパート・グールドが率いて絶好調のアルメイダ劇場でアイスキュロスの『バックスの信女たち』に出演。悔しきかな、切符が手に入らなかった。彼の顔を見なければ、サム・メンデスが監督した『007 スカイフォール』（2012年、イギリス・アメリカ合作映画）で、同シリーズ最年少のQに扮している。あの若造だ。

おっと、ジュディ・デンチ演じるMの隣に突っ立っているパツとしない助手がローリー・キニア。彼は昨年から日本にもお目見えしたナショナル・シアター・ライブ（NT Live⁵⁾）では、『ハムレット』（2013年、NT）のタイトル・ロール、また『オセロ』（2013年、NT）ではイアーゴを演じている。売れっ子なのである。僕もこのごろは流れるようにしゃべらない彼の独特のセリフまわしにはまってしまって、ロンドンではベン・ウィショーのギリシャ悲劇の代わりに、キニアが主演した『審判』（2015年、ヤング・ヴィク）を見てきた。不可解なカフカ作品の主人公に彼はぴったり。

そのキニアはリチャード二世の見せ場では、受けの演技に徹している。議会でウィショーが切々と語る長ゼリフを黙って聞いているだけで、銭が取れる。受けてナンボ、主役を立ててナンボの演技ができるのも名優の条件のひとつである。これがハリウッドや日本の俳優にはなかなかできない。

5幕。原作は年代記風で必ずしも面白くないところだが、30分以上かけて割と丁寧に描く。キニアが王位に就いても、相変わらず冴えない、威厳がないのがおかしい。なるほど、「空ろな王冠」をかぶった生身の人間なのだ。一方、リチャードはボンフレット城の暗い洞窟に半裸の姿で幽閉されている。オーマール（原作はエクストン）らが彼を殺しに来る。大弓から放たれた矢がリチャードの胸に突き刺さる。おっ、これは前に見たぞ。そう、開幕早々のクレジットが流れるシーンで、リチャードがお気に入りの家来

4) 言わずと知れたイギリス随一の演劇学校。べつにここを出れば箔がつくというわけではないが、やはりイギリスのトップクラスの俳優をみれば、RADAの出身者が綺羅星のごとしである。オックスフォード・ケンブリッジよりもRADA卒の方が一目置かれる。まあ、かの国の俳優はエリートが多いから、オックスブリッジを出た後RADAで学び、それから河原乞食になる例も多々あるが。

5) ロンドンのナショナル・シアターの舞台を国内外の映画館でライブ上映する企画。イギリスでは2009年6月にスタート、わが国でも2014年2月からTOHO系の映画館で見られるようになった。もっとも日本の場合はライブ中継ではなく、何カ月か遅れての上映だが、その代わり字幕がつく。あな、有難や。

ブッシーに、矢を受けて殉教する聖セバスティアヌス⁶⁾の絵を描かせていた。それだ。

ラストは、新王ヘンリー四世のもとに次々と謀反人たちの生首が届く。ほどなく粗末な棺桶に押し込まれたリチャードの遺体も。蓋を開けて、狼狽するヘンリー。カメラが上方に引いていくと、棺の中のリチャードは殉教したイエスのよう。冒頭の天井から吊るされたイエス像の姿と重なって、幕となる。

『リチャード二世』は映像向きの作品とはいいがたい。全篇叙情的な韻文からなり、長ゼリフも多く、動きのとぼしい、戦闘シーンにいたっては皆無の、地味で、ある意味退屈な劇である。だから、この芝居の成否は詩を朗じる役者の力量にかかっている。ルパート・グールドは映像的な技術を抑制的に使い、イギリスが誇る舞台役者たちに存分に語らせて、“非映画”的な傑作を生み出した。ベン・ウィショーはこの作品でBAFTA⁷⁾の主演男優賞を獲得している。

だが、『ヘンリー四世』2部作は、原作戯曲もBBC版もだいぶ趣が異なる。『リチャード二世』が叙情史劇ならば、^{リリカル・ヒストリー}『ヘンリー四世』は現実政治の世界をもっと写實的に、世俗的に、散文的に呈示する。ヘンリー四世の息子ハルの悪友フォールスタッフが活躍する「世話物」の場がその印象を一層強くさせる。

サム・メンデスは、ケンブリッジ大を卒業してほどないころ、ジュディ・デンチを起用して『桜の園』（1989年、オールドウィッチ劇場）を演出し、一躍脚光を浴びた。若干24歳の若者が日本でいえば“人間国宝”のような大女優にどうやって稽古をつけたのか？ 僕もイギリスに研究休暇で滞在した時期に、その20代の新進気鋭の演出家の舞台をずいぶんと見たが、ある意味若者らしくない、さして特徴のない、奇をてらわない、「古典をテキストのとおり舞台に乗せればこうなるよね」といった作品の数々。そうした台本の読みの正確さと深さでジュディ・デンチをはじめとする大御所たちを引っ張っていったのかと、あれこれ想像したものである。

そのサム・メンデスがはじけたのは、『アメリカン・ビューティー』（1999年、アメリカ映画）から。ハリウッドに乞われてアメリカン・ドリームをこき下ろすブラック・コ

6) 3世紀に殉教した聖人。全裸に近い姿で矢を受けている様がしばしば絵画に描かれる。伝説では矢で射抜かれても死なず、最後は撲殺されたという。後に同性愛の守護聖人となる。三島由紀夫もこの聖人の殉教画がお気に入りで、自らモデルとなり、篠山紀信に撮らせた写真がある。ご興味があれば、Googleで画像検索されたし。

7) 英国映画テレビ芸術アカデミー (British Academy of Film and Television Arts)、略称BAFTA。例年2月に発表される映画部門賞 (British Academy Film Awards) は「英国アカデミー賞」と訳されている。これとは別に、5月にテレビ部門賞 (British Academy Television Awards) の各賞が発表される。ベン・ウィショーが受賞したのはこの主演男優賞 (2013年)、また『ヘンリー四世』2部作ではサイモン・ラッセル・ピールが助演男優賞を獲得している。

メディを撮り、映画初監督でアカデミーの作品賞と監督賞を受賞した。あれも、彼が監督を依頼された時にはすでに出来上がっていた——監督だけ見つからなかったという——台本に忠実、視覚的な効果は抑え気味に、しかし的確に挿入して見事だった。テーマもストーリーも俳優も純正アメリカンなのに、どこかロンドンの舞台作品の香りがした。

けれども、サム・メンデスの方もギブ・アンド・テイク、映像技術を使いこなすノウハウをハリウッドから学んだのであろう。その経験が後年の、天性の映画監督かと思まがうばかりの『007 スカイフォール』の成功へとつながっていく。

お話は叙情的にあらざる、しかしだからこそ映像化に向いているかもしれない『ヘンリー四世』2部作に戻る。演出はリチャード・エア、彼もまた映像の何たるかをよく心得たベテランの演出家である。

『ヘンリー四世』第1部の1幕1場は、王宮のヘンリー四世が封建諸侯の反乱に頭を悩ませている姿、そして1幕2場は国王の苦悩を知ってか知らずか、王子ハルが真昼間にやっと起き出したフォールスタッフと悪態をつき合う様を描く。前者はちょいとお堅く、後者は下世話なシーン。戯曲のまま上演すると、どちらもじっくり、たっぷりの感がある開幕である。

リチャード・エアは、まず王子がアップテンポの音楽に乗って、フォールスタッフに会いに行く様子を映した。悪友はビヤ樽のような腹をさらし、高いびきで寝ている。ベッドの隣には尻を出したままの女。と、場面は王宮の深刻な会議に転換する。そして、またハルとフォールスタッフのくだりへ。

映画は「編集の芸術」といわれる。カットとカット、シーンとシーンをどうつなぐか、それが勝負だ、と。エアは冒頭の2場を短く切り分け、両者を交互に見せる。これだと、2つの場面が同時進行しているのがわかり、銀幕にリアルタイムの緊張感が漂う。さらに、スピード感も。

21世紀、演劇も映画もこのスピード感が大切だ。日常からして^{きぜわ}気忙しい現代においては、じっくり、たっぷりな退屈と眠気をもよおす。劇場でも教室でも。困ったものだ！⁸⁾

王子ハルに扮するのはベン・ウィショーと同世代の人気者、31歳のトム・ヒドルストンである。赤茶色の革ジャンを着た、今風の^{あん}兄ちゃん。衣裳だけでなく、表情や感情の出し方も、現代人のそれ。変に時代がかった作りをせず。これは今日のロンドンの舞台での演技方と共通する。ヒドルストンの顔を確かめたいなら、ウディ・アレンの『ミッ

8) カラオケに行くと、いつも痛感する。ゼミの学生の歌う平成の曲のスピード感。対して僕の昭和の歌のなんとテンポの遅いこと。じっくり、たっぷり、学生はウトウト、退屈そうに僕が歌い終わるのを待っている。教室でも同じだ。僕はNHK教育テレビのドキュメンタリーのように、じっくりとたっぴりと講義をしたいのだが、学生の顔を見ていると、つつい民放のバラエティ番組のような気忙しい授業になってしまう。慚愧！

ドナイト・イン・パリ』(2011年、スペイン・アメリカ合作映画)、ハリウッドの脚本家が1920年代のパリにタイムスリップするおとぎ話で、スコット・フィッツジェラルドに扮している。

また、フォールスタッフ役は、この四半世紀イギリス演劇界の屋台骨を支えてきたサイモン・ラッセル・ビール。若いころからしばしばサム・メンデスと組んで、RSCでもNTでも多くの名演技を披露してきた。ハルより背が低く、彼の目の高さまでしかないが、それでも存在感が違う。この番組、サイモン・ラッセル・ビールが初めてフォールスタッフを演じるということでも話題になった。

2幕4場のボアーズヘッド酒場の場面。フォールスタッフが大ぼらを吹き、ハルに嘘八百だとなじられ、しかしみごとにしらばくれる。さらに、二人がヘンリー四世の真似をして、国王を笑い飛ばすおなじみのシーン。ここは皆、大笑いはしているのだが、どこか危険な空気が漂う本気モード。王子も陽気に騒いではいるが、その内面は読めない。

酒場の女将クイックリーに扮するは、ジュリー・ウォルターズ。当たり役は『リタの教育』(1980年、ドンマー・ウエアハウス)のヒロイン、また『リトル・ダンサー』(2000年、イギリス映画)で主人公の少年にバレエを教えるウィルキンソン先生を演じた女優といえば、わかるだろうか。

ハルは反乱軍の決起で風雲急を告げる王宮に呼び出される。冷たそうな石造りのホールに、冷え冷えとした空気が漂う。赤い帽子をかぶり、ため息まじり、ふてくされた態度で現れた王子は、さっそく父王に罵倒され、口許に笑みを浮かべたところで、ピンタを食らう。ハルは真顔で十字を切り、敵の急先鋒ホットスパーの首を取って、これまでの不品行の償いをするという。

いざ、合戦。天下分け目のシュルーズベリーの戦いへ、フォールスタッフも嫌々戦場へ向かう。ほとんど白黒に近い映像。いいなあ、この寒々とした情景。デジタルの時代、色合いの調整も簡単にできるようになった。

「名誉って何だ？ 空気じゃないか」——ヘッポコ騎士の名ゼリフはナレーションで流し、彼の“意識の流れ”にした。そこに滑稽味はなし。真剣勝負の戦場での、彼の真情として捉えた。ハルとホットスパーの一騎打ちもリアルに見せる。ハリウッド映画の戦闘シーンに見劣りしない。そして、死んだふりを決め込んでいたフォールスタッフの決めゼリフ、「真の勇氣は慎重さなり」も、おどけた調子なし。喜劇ではなく、歴史劇だぞ〜、と。

BBC はかつてシェイクスピア劇全37作品を足かけ8年(1978~85年)にわたって制作・放映したことがあった。けれども予算不足にあえぎ、ほとんどがテレビ・スタジオ

でのセット撮影、演出も教科書的で、「退屈さに野次とあくびが絶えない⁹⁾」とまで酷評された¹⁰⁾。

そのトラウマから脱するべく、007の監督率いるチームは、ロケ撮影に徹し、シーンを入れ替え、セリフのカットもバッサバッサ、21世紀の映像技術をフルに使得、スピード感あふれる、観客に一気に見せる歴史劇を撮った。いや、お見事。これで30年前のBBCシェイクスピア・シリーズの呪縛から解放されたのではないか。

もっとも、『リチャード二世』はまだ2時間21分あったが、『ヘンリー四世』は2部とも1時間55分。ここも切ったか、あそこも切ったか、ちょっとカットし過ぎの感がなくはないけれども。

『ヘンリー四世』第2部。冒頭は小姓がフォールスタッフの小便の入った器を持って、彼の部屋に入ってくるところ（1幕2場）から。「流言」による口上はカット。映画はしばしば開幕シーンで、主人公ないしは視点人物を大写しにする。「今日は、この人の目線で物語を見るんだよ〜」と。この作品は少年のアップからスタートし、彼にフォールスタッフ没落の顛末^{てんまつ}を見とどけさせる。

舞台はスコットランドにほど近いイングランド北部に移って、1幕1場。僻地の景色は、淡い緑が美しい。背景に城が立つ。でも、CG映像は絵のような風景に過ぎるという向きもあろう。その領地でノーサンバランド伯が息子ホットスパー戦死の報に接する。

一方、フォールスタッフは高等法院長を煙に巻き、また貸した金を返さぬと訴えるクイックリーもなんとかなだめる。王子はシュルーズベリー^{シュルーズベリー}の戦いで改心したと思いきや、ふたたび王宮を抜け出して、ブラブラしている。父王の悩みは深い。

と、早くも3幕1場。真夜中、ヘンリー四世が眠られぬ夜を過ごしている。長いモノローグを、王宮をウロウロしながら、ごくごく自然に独り言としてしゃべる。夜中の廊下、松明が焚かれ、窓から月明かりがさす。みごとなライティング。映画は「光の芸術」とも呼ばれる。デジタルの時代になって、照明による表現の幅が広がった。疲弊した国

9) Susan Willis, *The BBC Shakespeare Plays*, The University of North Carolina Press, 1991, p.50.

10) サッチャー政権の緊縮財政のあおりを受けて七転八倒、やっとタイムライフ社からの出資を得るも、アメリカ側のスポンサーとの契約によって、シェイクスピアの生きた時代か作品の背景となった歴史上の時代にすべての作品の舞台を設定しなければならないと決められた。要するに沙翁劇を教育の一助として利用すべく、“オーソドックスな文化財”の制作を求められたわけである。しかし、ロンドンやストラットフォードで芝居を見れば否応なくわかることだが、シェイクスピア劇の舞台をエリザベス朝やそれ以前の古代・中世の時期に設定して芝居を打つなどものはやあり得ないのが、1980年代も現在も変わらぬ古典劇上演の状況。今にして思えば、あの逆風の中でよくぞ37作を最後まで制作したと、BBCに敬意を表したくなる。

王が無人の部屋に入る。玉座に近づき「幸福な民よ、眠れ」、さらに玉座に手を触れ「王冠を頂く頭^{こうべ}に安らぎは訪れない」。決めゼリフ！ 国王の姿はシルエットで、“絵”もピタリと決まっている。

ここで庶民のにぎやかな声が聞こえてきて、場面は2幕4場のボアーズヘッド酒場に戻る。フォールスタッフの愛人ドルが、飲みすぎて吐いている。その名のとおり過激なピストルがベロンベロンに酔っ払って登場し、一悶着起こす。民草のなんとノーテンキなこと。大人たちのアナーキーな騒ぎを横で小姓が見ている。

そこへハルと彼の腹心ポインズが現れる。フォールスタッフが膝の上に乘せたドルに聞かせる王子とポインズの悪口を屋根裏から盗み聞き。老人と情婦はいい雰囲気になり、ベッドに入ってよろしくやって……むろん、そこでお邪魔虫がバアッと。ハルがエロ爺^{じい}をやり込め、フォールスタッフが下手くそな言い訳をする。あゝ、お気楽。

舞台は王宮へ転換、さっきの3幕1場の続きのシーンになる。玉座に座ったまま寝入っている国王に臣下たちが駆け寄る。夜中の1時過ぎ。ヘンリー王は、「我々に運命の書を読みとる力があれば」と。唸^{うな}るように、「どんなに幸福な若者でも、来し方の危難、行く末の不幸を思っ、その書を閉じ、死を選ぶかもしれない」。支配者の、そして人生の苦さを語って絶品のセリフ、またそれを朗じるみごとなエロキューション。

おっと、ヘンリー四世役の俳優を紹介しわすれた。『リチャード二世』の時のロリー・キニアに代わって、続篇の二部作ではジェレミー・アイアンズが演じている。僕はこの俳優、これまでどうも好きになれなかった。あくが強すぎる。『ダイ・ハード3』（1995年、アメリカ映画）の、あのテロリスト役の男だ。いや、ハリウッド映画ならまだしも、わが愛するルイ・マルの数少ない駄作『ダメージ』（1992年、イギリス・フランス合作映画）、あれもぶち壊しているのはジェレミー・アイアンズのアくといえよう。

ところがぎゅっちゃん、シェイクスピア劇では抑えが利いている。世に「戯曲が役者を育てる」ということばがある。イギリスの俳優はシェイクスピアが、ロシアの役者はチェーホフが、フランスの俳優はモリエールが育てる、と。そりゃ、ハリウッドのスターはかわいそうだ。あんな薄っぺらな台本で演じていれば、“自分”を前面に押し出さないわけにはいかないだろう。

だが、イギリスの舞台役者はまず役柄になり切ろうとする。ジェレミー・アイアンズは、何よりヘンリー四世であらうとしている。もちろん、頬に大きな傷跡をつけるなど、いろいろやってはいるが、でも沙翁劇の詩行を語る彼のセリフ術が彼のあくを薄めて、渋い千両役者たらしめている。

3幕2場は、気分を変えてグロスターシャーの片田舎。一面の銀世界に12匹のアヒルが歩いてくる。フロスト^{フロスト}。雪も降らないのに、芝生に霜^{フロスト}が下りて、きれいな白銀の風景

を現出するイギリスの冬の風物詩である。そこに第2部の名物キャラ、田舎判事のシャローとサイレンスがやって来て、フォールスタッフの兵隊集めを手伝ったり、昔話をしたり。フォールスタッフは農民たちに賄賂を要求し、金をよこさぬ者だけを選び、ポンコツ部隊を編成する。ドタバタに近いシーンだが、ひとたび戦争が起こった際の民衆の悲哀をかいま見せて、有名な場面である。

王宮ではヘンリー四世が発作に倒れる。ベッドに横になり、王冠を枕の上に置かせる。ハルが駆けつける。王冠に指をかけて眠る父王に息子は、なにゆえそんな心をわずらわせるものを枕元に置いているのか、と。国王が死んだと思った王子は、王冠を手にもってホールへ行って、玉座に座り、王冠をかぶってみる。目から涙が流れる。

と、そこで父王が目覚めます。ヘッヘッヘッ、とても発作を起こしたとは思えない足どりでハルのもとへ。王子はバツが悪いことこのうえない。父子が対決する4幕5場の名シーン、リチャード・エアは王冠をかぶったハルを玉座に座ったまま動けなくし、瀕死の老王にその周囲を歩きまわらせ、王子をなじらせた。「愚か者が！ おまえがほしがっている王位という名誉は、おまえを押し潰す重荷にしかならぬのに。なぜあと半時間が待てないのだ？」

ハルは玉座から引きずり下ろされる。王子は父をなだめるように反論して、王冠にまつわる心労が父上の体をむしばんだ、それを呪いながら冠を頭にのせてみたのです、と。父と子は床に座り込む。国王は君主の統治いかにあるべきかを説く。最後に、自分が王位を手に入れた経緯について神に許しを乞い、ハルに王冠をかぶせ、次王の治世の平安を祈りながら息絶える。

このクライマックス・シーン、さすがのトム・ヒドルストンも、ベテラン俳優の前ではたじたじの感がある。先に散文的な芝居だと述べたが、ここはジェレミー・アイアンズが韻文劇の魅力を堪能させてくれる。ただし、ヒドルストンのセリフは切り過ぎ。飛ぶ鳥落とす勢いの若手役者に、もう少ししゃべらせてもよかったのではないかな。

映画は、前述したとおり、視覚的なメディアである。映像で見せながらくどくど語るのは野暮というものである。しかし、長い詩行が真骨頂のシェイクスピア劇、その映像化はどうあるべきか。

いったい小説は活字を追いながら想像をめぐらせて楽しむ娯楽である。一方映画は、繰り返すが、見せてナンボのメディア。だが、人間は見えてしまうと、そこから先に想像の翼が羽ばたかなくなる傾向がある。では演劇は、見るものか聴くものか？ 芝居はいくら舞台美術に凝ってみても、しょせん映像にはかなわない。それゆえ演劇は、映像と圧倒的にセリフ量が異なる。すなわち、俳優のセリフを聴き、想像の世界に遊ぶメディア。そう、小説ファンは演劇を、映画に近い^{メディア}媒体と考えがちだが、実は芝居は映画

より文学に近いのかもしれない。

戯曲は詩や小説とならぶ文学ジャンルのひとつと位置づけられ、一方映画のシナリオは文学とは認められていないのも、そうした理由による。とくにシェイクスピアの詩劇は文学のひとつの頂点をなす作品群であり、だからこそその映像化は一筋縄ではいかない難業なのである。

ラストはフォールスタッフが新王の戴冠式に駆けつけるが、「おまえなど知らぬ」と拒絶される、これも名高きシーン。沙翁劇全作品の中で最も有名な道化者の末路におどけなし、笑いなし。逮捕される彼を小姓が目当たりにして、去ってゆく。フォールスタッフの悲しげな顔をアップで捉えて、幕が下りる。

全篇、危急存亡の時代の緊張感をはらみ、その分フォールスタッフの道化ぶりは抑えられている。サイモン・ラッセル・ビールを連れてきて、彼に派手な立ち回りをやらせない。もともと目立つ役者ではないが、そうした地味でシリアスなフォールスタッフに徹してお存在感を保っている。彼が名優と謳われる所以であろう。

女流演出家シア・シャーロックの『ヘンリー五世』は、少女が野の花を一輪摘むアップの映像から。寂しげな音楽。民衆が教会の前に集まっている。少女が喪服の王妃に花を投げる。まだ若い王妃がかすかに微笑む。彼女の後ろには侍女に抱かれた赤ん坊。

教会で葬儀が始まる。結婚式ではなく葬式である。すると、ヘンリー四世の葬儀か？
原作冒頭の高らかな序詞がナレーションで流れる。ただし、昔を優しく思い出すような調子。ふつうの序詞役と違う！
プロローグ
ただ、いい声をしている。誰だ？ と、すかさずジョン・ハートとクレジットされる。そして遺体は、おゝ、トム・ヒドルストン。彼の顔がアップになって、「ヘンリー五世」とタイトルが出る。

つまり、ヘンリー五世の死から始めたわけか。でも、この演出は危ないよ。今時、女流演出家がどうのこうのと言うのも時代遅れだろうが、
りんりん
勇氣凜々の、ある意味マッチョな愛国劇を女性の視点から描こうってか。う～ん、大丈夫かいな？！

場面が転換し、白馬にまたがり疾走させるヘンリー五世。カンタベリー大司教とイーリー司教が王宮の廊下を歩きながら、国王の噂をしている。即位してから、皇太子のころとはガラリと変わった、と（1幕1場）。ヘンリー五世が王宮に到着、ひょいと王冠を受け取り、頭にかぶる。玉座に腰を下ろしても、肘をついて、格好いいねえ。フランス使節がテニスボールをみやげに若いイングランド王をからかうシーンも、ピシャリと言いついて、ステキ。イケメンで、むろんセリフまわしも文句なく、ヒドルストンの魅力炸裂といったところか。

フランスとの戦争が始まる。居酒屋の庶民たちも、イングランドの白地に赤十字、「セ

ント・ジョージ・クロス」の布を腕に巻き、氣勢を上げる。だが、クイックリーがフォールスタッフの死を男たちに告げる。ジュリー・ウォルターズの達者な語り。安心して聞いている。バードルフ、ニム、ピストルとの別れはしんみりと。戦争に連れていかれる民衆の心情を反映させる。

2幕2場、ヘンリー王の臣下たちの陰謀が露見するサザンプトンの場は全部カット。また、エクセター公が国王の名代としてフランス王に謁見し、フランス王位を要求するシーンはなんでもない場面だが、老貴族に扮するアントン・レサーが^{やすやす}と沙翁の詩行を朗じる、そのセリフまわしを聞いているだけで満足。背の低い、見栄えのしない爺ちゃん、でもエロキューションと表情と、そして目の演技も抜群。そう、芝居を締めるのは、こういうベテランの脇役である。

と、速い、速い。37分で2幕まで終わってしまった。イングランド軍の船の帆はセント・ジョージ・クロス。おっ、かつてのフォールスタッフの小姓もドーバー海峡を渡る船に乗っている。ハーフラー攻め（3幕1場）は、城壁を登ろうとして、上から熱湯をかけられる。ヘンリーが「もう一度突撃だ」と兵士たちを励ます長ゼリフ、ローレス・オリヴィエもケネス・ブラナー¹¹⁾も馬上から勇壮に激励したが、ヒドルストンは白馬から降り、膝をついて部下たちに語りかける。カメラはずっとアップ。へへエ、なんか演出が小さくないか。

フランスの王女キャサリン（メラニー・ティエリー）が侍女のアリス（ジェラルディン・チャップリン）に英語を教わる場（3幕4場）は、シリアスな歴史劇に緩急をつけるために思いきりコミカルに演出するのが通例だが、シア・シャーロックは必ずしも滑稽に作っていない。また、バードルフが行軍中に盗みをはたらいて処刑される場面（3幕6場）、ヘンリーが登場した時には、ボアーズヘッド酒場の旧友はすでに木に吊られている。国王が断腸の思いで、しかし軍規を正すべく毅然として死刑を命ずるシーンだが、映画はヘンリーが何もできない状況に設定している。

この作品も、シーンの入れ替えは頻繁、セリフも相当カットしている。

4幕に入り、アジンコート¹²⁾の戦いの前夜、ヘンリー王が野営地を巡回する。国王はひとりになり、大地にひざまずいて神に祈る。その不安げな姿を小姓に見られているのに気づいて、立ち上がる。

夜が明ける。イングランド軍の劣勢は明らかである。フランス側の兵員はわが軍の5倍だと貴族たちが弱気になっている。そこにヘンリー五世が現れて、彼らを叱咤する。

11) ローレンス・オリヴィエ監督・主演の『ヘンリー五世』（1944年、イギリス映画）およびケネス・ブラナー監督・主演の『ヘンリー五世』（1989年、イギリス映画）。詳しくは、拙著『シェイクスピア・オン・スクリーン』（三修社、1996年）の第6章「英国史劇」を参照されたい。

4幕3場、イギリスが誇る愛国劇のそのまた最も愛国的と謳われる「聖クリスピアンの日のスピーチ」である。ここは国王の感動的な演説に周囲の兵士たちも集まってきて、一気に盛り上がる、そんな大歌舞伎にしたいところ。ヒドルストンはウェスモランド伯にまず語りかけ、それから貴族ひとりひとりに。しかし、カメラはアップのまま。聴衆も貴族たちだけ。おっと、小姓も聞いているが。兵隊の数が足りないなんて嘆くが、「我々は幸福な少数だ」と演説がサビの部分にさしかかるとヒドルストンはちょっと涙目、だがここでもカメラは引かない。女流演出家は、国王をカリスマ的に撮ることを拒否して、小さな演出に徹する。

が、これ、意図はわかるが、なんか面白くない。ヒドルストンの上手な語りまで一本調子に思えてくる。けれども批評家曰く、「ヘンリーは好戦的愛国主義を嫌っているだけでなく、自身の弁舌にもうんざりしている」、「彼はなんとか自分のことばを信じようとしているのだ¹²⁾」と。なるほど。ヘンリーは単に王位に就いただけでは王権を神授されたとは信じられない、自分は偉大な国王にならねばと思い、でもそうはなれない自分がいる。彼はイングランド王として将校たちを鼓舞しながら、その心を揺さぶる自分のことばを疑っている。さらには権力の何たるかにさえ懐疑的になっている、ってか。おゝ、現代的！¹³⁾

この等身大のスピーチに感じ入った王の従弟、黒人のヨーク公が前衛を任せてくれと志願する。戦闘開始。激しい戦い、アップが多いが、デジタルの時代だ、リアルに、迫力のある戦場シーンになっている。ヘンリーは馬から落とされ、歩兵とともに戦う。白兵戦だ。国王の勇敢な姿を、しかし大きくは見せない。

森の中、小姓の肩に後ろから手をかける男がいる。嫌な予感。原作にある子供たちまで虐殺されたという話（4幕7場）はカットされている。代わりにこの少年がやられるのではない。だが、男はヨーク公だった。そして、小姓ではなくヨーク公が背後からの剣に倒れる。少年は生き延びて、アジンコートの戦いの見届け人となる。

やがて雌雄が決する。イングランド軍勝利と自軍の戦死者少なしの報に、ヘンリーは兵士たちにはばかりことなく大地に両膝をついて神に感謝する。

5幕2場はフランス王宮での和平交渉と、王女キャサリンへの求婚の場。ヘンリーは途中から王冠を脱ぎ、下手くそなフランス語でキャサリンにプロポーズする。やっと王女と、侍女アリスと、そして息苦しかった銀幕にもなごやかな雰囲気が漂う。フランス

12) Ben Lawrence, "The Hollow Crown: Henry V, BBC Two, review" *The Telegraph*, 22 July, 2012.

13) 人の上に立ちたくない、組織の真ん中なんて窮屈だ、権力を欲する奴の気が知れない、身の丈ほどの人生を送りたい——そんな僕の人生観に近い演出と役作りではある。

王が部屋に入ってくる。ヘンリーが「あなたのご息女を妻にしたい」、フランス王が辛そうな顔で、「差し上げよう、息子よ」。もちろん政略結婚である。が、二人の笑顔には真実の愛がうかがえるというお話。

けれども場面が転換すると、キャサリンの悲しげなアップ。冒頭の葬儀のシーンに戻る。コーラスによるエピローグがナレーションで流れる。キャサリンが生まれたばかりの赤ん坊、ヘンリー六世をアリスから受け取り、抱きかかえる。この映画に登場した貴族たちも参列している。小姓がセント・ジョージ・クロスの布を握りしめている。彼の手にカメラが下りてゆき、同じ布きれをもつ男の手のアップからふたたびカメラが上がっていくと、おゝ、やっと顔を見せたか、ジョン・ハート。デヴィッド・リンチの『エレファント・マン』（1980年、アメリカ・イギリス合作映画）に主演した俳優が、こんな優しげなお爺ちゃんになっちゃった。

と、そう、小姓が老いてからコーラス役として語るイングランド史という仕掛けである。ジョン・ハートが無人のホールの玉座に歩み寄り、セント・ジョージ・クロスの布きれにいとoshiげに口づけし、この苦渋に満ちた物語のすべてを包みこむようにまろやかな声でエピローグの最後の1行半を語る。かすかに口許に笑み。フェイドアウト¹⁴⁾。

賞は取れない作品である。トム・ヒドルストンはいわばやり損なヘンリー五世に徹して、プロの舞台役者の心意気を示した。シアア・シャーロックは愛国劇の数々の雄々しき名ゼリフをカットしたりテンションを落としたり、さらには沙翁の豊かな遊びまでそぎ落として緩急のつかぬことを恐れず。だが、イギリスの誇る英雄伝説をみごとに反転させ、ややもすると窮屈で解放感のなかった等身大の国王の物語は、ラストのジョン・ハートの包容力あふれる語りで洗い流される。

ヘンリー五世、享年35歳。彼もまた、アジンコートの戦いにおける栄光を手に入れる英雄というよりは、若くして世を去った儚き^{はかな}国王だった。この歴史劇シリーズのタイトルは『空ろな王冠』。

ちなみに僕の修士論文のタイトルは、“A Study of *Richard II: The Hollow Crown*”。なるほど、こういう風なことを書きたかったのかもしれない。が、あの時は力およばず。いや、蛇足の独り言でございます。(2015年10月 脱稿)

14) シェイクスピアの戯曲では、ウェールズ人のフルーエリン、アイルランド人のマックモリス、スコットランド人のジェイミーらが共に戦う姿が描かれているのだが、シアア・シャーロックは、イングランドの旗の下にフランス軍と相まみえたことにしている。